

タイに伝わる *Uṇhissa-vijaya* と『仏頂尊勝陀羅尼經』

畝 部 俊 也

1. はじめに

タイ王国（旧名シャム王国）には 20 世紀はじめの頃まで、美しい絵画装飾をほどこし、読誦儀礼用の数種のテキストをコム文字（いわゆるクメール文字）で記した大型の紙折写本を作成する伝統が存在していた。このような写本は、コーイ紙（桑科の植物から作った厚手の紙）で作成されたため、サムット・コーイと呼ばれるが、その美術的な価値の高さから、現在は欧米の図書館等に多く保管されている。この種の写本の美術面は以前より注目されており、本稿筆者もオックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の 18 世紀の写本 BODL MS. Pali a. 27 (R) を紹介する Appleton, Shaw and Unebe (2013) において、その図像について解説しておいた。しかし、サムット・コーイに含まれる文献についての研究は未だ充分行われておらず、ローマ字転写および翻訳をまとまって提示した田辺 (2013) により、研究はようやく緒に就いたばかりと言えるであろう。

18 世紀のサムット・コーイには、一般にパーリ三蔵の要約に加え、読誦用の蔵外パーリ語文献数種が書写される。そのうちの主たるものは、*Mahābuddhagūṇa*（『偉大なる仏徳』）であるが、このボードリアン図書館蔵写本の場合はその他に *Sahassanaya* と呼ばれる瞑想に関する文献、そして、本稿で取り上げる *Uṇhissa-vijaya*（『仏頂尊勝』）が含まれている。19 世紀になって、主たるテキストが *Phra Malai*（『マーライ尊者の物語』）というタイ語の文献¹⁾ に交代するまでのサムット・コーイは、この写本のように *Mahābuddhagūṇa* を中心とするのが標準的な構成であった²⁾ とひとまず考えても良いと思われる。

本稿ではこのうち、北伝の仏教においても広く信仰され、仏教文化史上重要な役割を果たしてきた『仏頂尊勝陀羅尼』（*Uṣṇīṣa-vijaya-dhāraṇī*）、およびその因縁譚や効能を物語る『仏頂尊勝陀羅尼經』と関連する *Uṇhissa-vijaya* を取り上げ、その内容を紹介することとしたい。

(202) タイに伝わる *Uṇhissa-vijaya* と『仏頂尊勝陀羅尼經』(畝 部)

2. *Uṇhissa-vijaya* の諸資料

タイの *Uṇhissa-vijaya* は、パーリ語の韻文テキストであり、分量としてはほぼ 77 偈 (154 行) よりなる³⁾。写本上、タイトルとしては “*Uṇhisa-*”, “*Uṇhassa-*”, “*-vijeyya*” などといった形で別様に綴られることもあるが、一見してわかる通り、この題名はサンスクリット語の *Uṣṇīṣa-vijaya* (仏頂尊勝) に相当するものである。「仏頂」*Uṣṇīṣa* とは、仏の三十二相の一つで仏の肉髻 (頭頂部にある盛り上がり) のことであり、北伝の仏教ではこれを神格化して「仏頂尊」としており、それを象徴する『仏頂尊勝陀羅尼』の信仰が広く行われた。日本に伝わる有名な法隆寺貝葉で『般若心経』とともに書写されているのがこの陀羅尼であり、オックスフォード大では M. ミュラーが南条文雄とともにこれを Müller and Nanjio (1884) として編集・出版している。この北伝系の *Uṣṇīṣa-vijaya* は、陀羅尼としてだけでなく、それが説かれるようになった因縁譚を伴う『仏頂尊勝陀羅尼經』(仏陀波利訳 T no.967 他漢訳多数) の形でも伝えられている。

パーリ語版の *Uṇhissa-vijaya* は、パーリの三蔵には含まれない蔵外仏典である。バンコクのワット・ポー寺院のティアブ・マライ長老によれば、バンコクのような大都市部の寺院においては、現在では僧侶によって読誦されることはないとのことであるが、これはおそらくそのためであろう⁴⁾。ただし、厄除け・寿命増大など、日本の『仏頂尊勝陀羅尼』とよく似た効能のあるものとして、現在でも地方によっては読誦されているし、民間信仰的にもよく機能しているようである。マライ長老自身からも、出家前のまだ子どもの時分に、「不慮の事故にあって命を落とすことのないようにこれを覚えておきなさい」と、母親からこの *Uṇhissa-vijaya* を習ったことがある、と伺っている。この場合の *Uṇhissa-vijaya* とは、写本類に見られる長いテキストではなく、役割的には北伝の陀羅尼本文に相当する 5 偈分のみの護呪的なものである。タイの写本類に見られる *Uṇhissa-vijaya* には、長さの異なる数種類のバージョンが存在していることがわかっている⁵⁾。

タイには、紙折写本以外に貝葉写本の伝統もあり、*Uṇhissa-vijaya* 単独でニッサヤ (タイ語訳註) を付した貝葉写本も存在している。タイに伝承される *Uṇhissa-vijaya* の全体像を把握するためには、パーリ語以外の地方語での伝承を含めた包括的な文献調査が必要である⁶⁾。

3. *Uṇhissa-vijaya* と『仏頂尊勝陀羅尼經』

ここで北伝の『仏頂尊勝陀羅尼經』に目を転じてみよう。『仏頂尊勝陀羅尼』には、既に Müller and Nanjio (1884, 33-34) に紹介されていたように、その因縁譚として帝釈天の依頼を受けた釈尊が善住 (Supraṭiṣṭhita) という名の天子に陀羅尼を教示するタイプと、觀自在菩薩の求めに応じて無量寿如来が陀羅尼を説くタイプという2種類があることが古くからわかっている。近年『仏頂尊勝陀羅尼』について包括的な研究を進めている佐々木 (2009, 214-216) によれば、原本の年代として前者のタイプは7世紀、後者のタイプは10世紀までをその成立の最下限と考えることができる。インド、ネパールで従来収集されたサンスクリット写本に見られる因縁譚は全て後者のタイプ、チベット語も9世紀頃訳出の一本を除いて、10世紀以降に翻訳されたであろうものはほぼ後者のタイプであるため、善住天子を主人公とする因縁譚は10世紀頃までには大乘的色彩の強い後者のタイプに取って代われ、前者のタイプのサンスクリット語原典は失われてしまったように思われてきた。ところが、ギルギット・バーミヤンからの写本一本 (通称 LA Manuscript) に、『仏頂尊勝陀羅尼經』相当の物語が含まれ、そこにこの前者のタイプの因縁譚が語られていることがしばらく前に報告された⁷⁾。そして、近年になって、Melzer (2007) による写本転写と暫定的なエディションが公表されている。この写本は文字から見ておそらく7~8世紀に遡るものと考えられている。

タイの18世紀のサムット・コーイ写本に収められた *Uṇhissa-vijaya* の因縁譚は、この二つのタイプのうちの前者のタイプ、つまり、善住 (Supaṭiṣṭhita) という名の天子に対して、帝釈天の求めに応じて釈尊が説くというタイプのものになっている。インド圏では10世紀に姿を消してしまったであろう物語が空間的にも時間的にもはるかに隔たるタイの写本に現れているのである。

以下にサンスクリット語版 (およびその漢訳、チベット訳) の伝える内容⁸⁾ と、パリー語版の内容とを比較して、一致する点、相違する点を指摘しておこう。

両者がおおむね一致して伝える内容は、以下の通りである。

- a. 三十三天に善住という名の天子がいたが、あるとき、これから七日目に命終するという予言を受ける。予言は、天界からの死没後について、7種のよくない境涯に生まれたり、地獄の苦しみを経験するとも告げていた。
- b. 善住天子は三十三天の主たる帝釈天に救いを求めるが、帝釈天は自分ではなく釈尊に救いを求めるべきと述べる。

(204) タイに伝わる *Uṇhissa-vijaya* と『仏頂尊勝陀羅尼經』(畝 部)

- c. 釈尊を訪れた帝釈天に対し、釈尊は「仏頂尊勝」を説き示す。
- d. 「仏頂尊勝」の用法、およびその功德を説明する。
- e. 善住は「仏頂尊勝」を修することによって寿命を延長する。

このような共通するストーリーを伝える両者であるが、次に示すように、サンスクリット語版とパーリ語版の間には興味深い相違点が多々存在している。

まずは、上記 a のセクションが始まる前に、『仏頂尊勝陀羅尼經』というタイトルを持つ漢訳版には、「如是我聞」から始まるいわゆる經典の通序にあたるセクションが付されており、この經典が説かれたのが舍衛城の祇園精舎であることが明示されている。(ただし、この一節は漢訳の際に、通常の「經典」の形式に整えるために文言が補填された可能性もある。)

これに対し、パーリ語版の方には經典形式の通序は見られないが、本文中にこの説法の会処が三十三天であり、また時としては釈尊自身が釈尊を出産した七日後に天界に生まれ変わった母マーヤー夫人にアビダンマを説くために滞在していた時であったと説明している。つまり「如是我聞」はないものの、北伝のものとは異なる形で場所・時などの情報が示されているのである。

なお、タイ仏教における三十三天説法のモチーフの重要性を考えた場合、「仏頂尊勝」の説法の会処が三十三天に設定されていることは興味深い。ボードリアン図書館蔵の写本の *Uṇhissa-vijaya* のテキストが開始されるページには釈尊が三十三天において説法する場面が描かれており、そこだけが唯一、文献の内容と装飾絵画の内容とが一致していることにも注目すべきであろう⁹⁾。

次に善住天子が受ける予言の内容であるが、パーリ語版は7日目に天界から没すると、阿鼻地獄に堕ち、その後合計7種のよくない生まれを経験する、つまり、5種の畜生(鳥類、動物)に生まれ変わったあと、さらに目の見えない者、耳の聞こえない者として生まれ変わる、とされている。これに対して、サンスクリット語版では、7種の畜生に生まれ変わったあと、地獄に堕ち、その後たとえ人間に生まれ変わったとしても、貧しく目の見えない者になるとしている。

次の b の箇所では、パーリ語版のみに、「天人五衰」の現れた善住天子の懊悩が詳しく描写されている。

c の箇所の相違点として、サンスクリット語版は帝釈天が独りで舍衛城にいる釈尊を訪ねることになっているのであるが、パーリ語版では帝釈天は善住天子を伴って三十三天に滞在している釈尊を訪ねることになっている点がまず挙げられる。先に見た説法の会処の差異に相応したものと言えるであろう。

また、善住天子を救済する手だてとして「仏頂尊勝」を説示するにあたって、サンスクリット語版は前置きとしてその功德について説明しているが、パーリ語版はその代わりに悪趣への再生の由縁となる業報を具体的に説明している。

続いて、善住の命終と悪趣への再生を妨げるものとして、サンスクリット語版では陀羅尼、タイ写本においては以下の5つの偈文が説かれるが、これらは内容的にはお互いに関連していないようである。パーリ語版に関しては厳密にテキスト校訂を終えていない段階ではあるが、参考までに試訳を提示しておこう¹⁰⁾。

仏頂尊勝という世間における最上の法がある。一切衆生の利益のために、天人よ、汝はそれを護持しなさい。(1)

[この仏頂尊勝によって] 王による懲罰や、人間ならざるものによる火炎を避けられるだろう。虎、蛇、毒、幽鬼を、時ならぬ死を避けられないことがあるか。(2)

時宜を得て死ぬ以外、いかなる死からも自由になる。まさにその力により、常に幸せな天人であれ。(3)

清浄な戒を受持し、善行の法を実践しなさい。まさにその力により、常に幸せな天人であれ。(4)

書かれたものであれ、思念されたものであれ、供養としてであれ、記憶されたものであれ、口に出されたものであれ、尊重すべきものとして、他の人々のため[その]教えを聞いたなら、その人の寿命は増大するのです。(5)

Skilling (2009, 34) も指摘するように、ここには「仏頂尊勝という世間における最上の法がある」とは説かれるものの、その法が何であるかは説明されない。したがって、北伝の陀羅尼のようなテキストがもともと別に存在していた可能性もあるが、現在のタイで陀羅尼に相当する護呪として、あるいは「仏頂尊勝」本文として機能しているのは、上記のような内容の5つの偈である。

続くdのセクションは、全体としては「仏頂尊勝」の用法と効能とを説明するものであるが、サンスクリット語版とパーリ語版の展開はかなり異なっている。サンスクリット語版では陀羅尼の用法と功德が説かれた後¹¹⁾、ヤマ王が登場し、それを受持する人を地獄へ堕ちないように守護することを述べ、次に、続けて登場する四天王の求めに応じて陀羅尼読誦の方法が詳説される。さらに続けて、印契や作壇法への言及も含む「陀羅尼成就の儀軌」(dhāraṇīsādhakavidhi) が説かれるが、この箇所はチベット訳には存在していない。一方のパーリ語版は、上記「仏頂尊勝」が説かれた直後に、続けて仏・法・僧の三宝を薬、治療と見なすことが説かれ、帝釈天は仏より1~7日に渡って人々の苦が滅するまでこの治療を行うように、という委嘱を受ける。そしてこの治療(jīvadāna, 文字通りには「命の布施」)

(206) タイに伝わる *Uṇhissa-vijaya* と『仏頂尊勝陀羅尼經』(畝 部)

を行う人の得る功德が続けて説明されている。

最後に、e のセクションで、この「仏頂尊勝」の法によって、善住天子の寿命が延長されるのであるが、サンスクリット語版では、帝釈天がまず善住へ「仏頂尊勝」を伝え、それを六日六晩修した善住の寿命が延長されるという次第が説明される。一方のパーリ語版では善住も帝釈天とともに釈尊の元で法を聞いていたため、詳しい次第は説明されない。サンスクリット語版には、さらに最後に、帝釈天と善住天子とが釈尊を再訪したという一節が存在している。

4. まとめと今後の課題

以上、パーリ語版、サンスクリット語版という二つの「仏頂尊勝」*Uṇhissa-vijaya*/*Uṣṇīṣa-vijaya* の内容を概観した。この両者は内容に相当の差があり、文体も異にしていることから、どちらかがどちらかの翻訳、というような関係にあるものではない。内容の面で二つを比較してみると、大筋としてはよく相応した物語を伝えつつも、伝承された地域の仏教のかたちを反映した異なった特徴を持っていることがわかる。三蔵を構成するニカーヤ／アーガマ中の対応する経典の多くが、基本的にはほぼ同じ教説やストーリーを伝えつつも、多くの相違点を有しているのと状況は似通っていると言えよう。しかし、三蔵に含まれる経典の場合、共通ソースとしての釈尊の直説(仏説)の存在は自明のものとして不問に付されてきたが、このパーリ語の *Uṇhissa-vijaya* という文献の場合は、いったいどのように考えればよいのであろうか。

Uṇhissa-vijaya はパーリ三蔵外の、今のところ写本としては18世紀までにしか遡れない仏典である。しかも、現在の大乗仏教圏、ネパールでは善住天子が登場する因縁譚を伝える梵文写本は見つかっておらず、無量寿如来を教主とする因縁譚に置き換わっていることから、10世紀以降のインド圏にパーリ語版のソースを求めることはできないようにも思われる。すると、現在のパーリ語テキストの元になるものは、10世紀より前のものであったことになるが、そのようなソースが存在したとして、それはいったいどのようにしてタイに伝えられ、現在まで伝承されてきたのだろうか。例えばシュリーヴィジャヤなどの大乗仏教を奉じていたとされる東南アジアの古の国々と何らかの関係があるのであろうか。

一方で、Skilling (2009) も強調するように、このような ‘quest for origins’ が有意な成果を導くとは必ずしも限らない。この種の文献の東南アジアへの受容は直接的な翻訳事業のようなものではなく、もっと自由に創造的なものであったで

あろうし、単なるインド仏教文化の輸入というより、むしろタイにおける語り直しと見るような従来とは異なった観点からも、仏教文献の受容史を構築していく必要もあるであろう。

このような問題は、文献学的研究のみによって解答を与えることはできないもので、今後歴史学など隣接分野との共同研究が望まれる。まずは仏教文献研究の立場からテキスト校訂、訳出を行い、現在のタイに残る蔵外パーリ語仏典とそれに関連する読誦儀礼など仏教文化全般の研究への基礎資料を提供することを、さしあたっての目標としておくこととしたい。

-
- 1) この『プラ・マーライ』については畝部・山本 (2008)、佐久間 (2008) 参照。
 2) *Mahābuddhagūṇa* 以外の蔵外テキストには出入りもある。なお、本研究の基礎資料たる写本データの多くは Jacqueline Filliozat 女史より提供いただいたもの (EFEO DATA Filliozat CD-ROM) である。ここに記して謝意を表すものである。 3) テキストが未だ確定できていないため、これは暫定的な目安である。 4) 蔵外仏典の読誦やそれを用いた儀式などは、おそらく 19 世紀のラーマ 4 世による宗教改革 (タマユット運動) 以降、都市部では次第に実践されなくなったようである。 5) EFEO DATA Filliozat を参照する限り、パリッタ (護呪) 類を集成した写本に含まれる場合は、長いバージョンの後半 30 偈程度のみが収録される。Skilling (2009, 42–45) に長中短の 3 種の長さの刊本所収テキストについての報告がある。 6) 筆者の調査した範囲は、アユタヤ期末期以降の中央タイの紙写本のみに限られる。*Unhissa-vijaya* は北タイの写本カタログにも多数記録されており、こちらも専門研究者による調査が望まれる。 7) この写本そのものについては Batton (2000) に詳しく報告されている。 8) 梵本は Melzer (2007, 112–116) の Provisional Edition を使用した。(資料をご恵贈下さった佛教大学松田和信先生に感謝申し上げます。) チベット訳との対応もそこに示されている。他の一次文献の情報については、佐々木 (2009, 213) に見られる一覧表を参照いただきたい。以下、漢訳としてはこの一覧表中の①仏陀波利訳 (大正 No.967) と比較している。また、チベット訳は⑩ジナミトラ・イエシェーデ等共訳 (東北 No.597) と比較しており、以下の本文中「チベット訳に存在していない」としている箇所はこの訳に欠けているということであり、Melzer (2007, fns.33, 38) が示すように、儀軌の箇所など⑪ (東北 No.598) 中に対応する文がある。 9) この場面の重要性に関しては田辺 (2009, 83–91) 参照。田辺 (2009, 88–89) が述べている「三十三天説法の文」というのは、まさにこの *Unhissa-vijaya* の冒頭部分のことである。また、三十三天説法が、タイの布薩堂の壁全面を使って描かれる仏伝図の中心であり、全体としての堂宇荘厳プランの基礎となっている可能性については、Appleton, Shaw and Unebe (2013, 57–58; 91; 106–107) 参照。 10) 以下暫定的なテキストを挙げておく: *atthi unhissavijayo dhammo loke anuttaro/sabbasattahitathāya taṃ tvam gaṇhāhi devate/1/ parivajje rājadaṇḍe amanussehi pāvake/ byagghe nāge vise bhūte akālamaraṇe na vā/2/ sabbasmā maraṇā mutto ṭhapetvā kālamāritam/ tass' eva*

(208) タイに伝わる *Uṇhissa-vijaya* と『仏頂尊勝陀羅尼經』(畝 部)

ānubhāvena hotu devo sukhī sadā/3/ suddhasīlaṃ samādāya dhammaṃ sucariṭaṃ care/ tass' eva ānubhāvena hotu devo sukhī sadā/4/ likkhitāṃ cintitaṃ pūjaṃ dhāraṇaṃ vācanaṃ garuṃ/ paresaṃ desanaṃ sutvā tassa āyu pavaḍḍhati ti/5/ なお、この5偈は流布版として多くの読誦本に含まれており、インターネット上で実際の読誦の様子も見ることができる。また、古くラオスの仏典を研究した Finot (1917, 75-76) は、全8偈よりなるバージョンを仏訳とともに収載しているが、そこにも最初の5偈として含まれている。11) 梵本にはこの箇所の一部漢訳などと対応しない箇所があるが、しばらく後の似たような語句が使われる一節までの脱落であることから、単なるアイ・スキップ(写本筆写者の読み飛ばしによる転写ミス)の可能性が高い。内容は相当する漢訳と藏訳から回収可能である。

〈文献〉

畝部俊也・山本聡子 2008「タイ仏教写本『プラ・マーライ』について」『アジア民族造形誌』8: 87-98. 佐久間留理子 2008「タイ仏教の蔵外經典『プラ・マーライ』の写本研究」『アジア民族造形誌』8: 99-117. 佐々木大樹 2009「仏頂尊勝陀羅尼概観」『現代密教』20: 211-234. 田辺和子 2009「アユタヤー期後期からバンコク期初期に書かれた絵入り折本紙写本の解読」『パーリ学仏教文化学会』23: 73-92. 田辺和子(編) 2013『タイ伝承写本に見られる「マハーブッダグナ」(偉大なる仏徳)の研究』. 松田和信(編) 2007『平山郁夫コレクションのアフガニスタン・パキスタン出土仏教写本研究』. Appleton, Naomi, Sarah Shaw, and Toshiya Unebe 2013, *Illuminating the Life of the Buddha: An Illustrated Chanting Book from Eighteenth-century Siam*, Oxford: Bodleian Library. Batton, Susan Sayre 2000, "Separation Anxiety: The Conservation of a 5th Century Buddhist, Gandharan Manuscript" (<http://asianart.com/articles/batton/index.html>). Finot, Louis 1917, "Recherches sur la littérature laotienne," *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* 17: 1-218. Melzer, Gudrun 2007, "The Gilgit manuscript of the Sarvagatipariśodhama-uṣṇīṣavijayā kept in the Miho Museum," in 松田 (2007, 107-116). Müller, F. Max and Bunyiu Nanjio 1884, *The Ancient Palm-Leaves: Containing the Praṇā-Pāramitā-Hridaya-Sūtra and the Uṣṇīṣa-Vigaya-Dhāraṇī*, Oxford: Clarendon Press. Skilling, Peter 2009 (2005), "Pieces in the Puzzle: Sanskrit Literature in Pre-modern Siam," in *Buddhism and Buddhist Literature of South-East Asia*, ed. C. Cicuzza, Bangkok and Lumbini: Fragile Palm Leaves, 27-45.

(平成24~26年度科学研究費補助金基盤研究C「タイの装飾写本等に基づくパーリ語蔵外仏典の研究」による研究成果の一部)

〈キーワード〉 サムット・コーイ, 蔵外パーリ語仏典, ギルギット・バーミヤン写本
(名古屋大学准教授, 博士(文学))